先駆的研究の到達点

緻密で興味深い実証を土台とした

永岑　三千輝

野村　真理著

ウィーン　ユダヤ人が消えた街

オーストリアのホロコースト

ハマス・イスラエル戦争勃発でイスラエル政府は「ホロコーストに対する反撃」を掲げて大々的軍事作戦を展開している。しかし、ガザ地区の悲惨な状態は世界周知となり、南アフリカ政府が国際司法裁判所にジェノサイドの罪で訴えるまでになった。本書の刊行はホロコースト問題への関心が高まった時点とたまたま時期的に重なった。しかし本書は長期にわたる先駆的研究の積み重ねの到達点である。開拓的研究書として学士院賞を受けた『ウィーンのユダヤ人――一九世紀末からホロコースト前夜まで』（御茶の水書房、一九九九）の上梓後、二十数年間に進めた緻密で興味深い実証が土台である。

この間、著者はウィーン研究から離れ、ホロコーストの舞台となった東欧諸地域に研究領域を広げた。現地の人々へのインタヴューをはじめ、幾度も現地調査を行い、史料を発掘し、さらにドイツ現代史の最新の到達点を示す史料集を渉猟して、論文・著書を発表してきた。そして再びウィーンに立ち返って、オーストリア史におけるユダヤ人の迫害からナチス期における殺戮までをたどってまとめた。

ナチス・ドイツによるヨーロッパ・ユダヤ人の迫害と殺戮（1933―1945）は、ドイツからだけでは見えてこないながら、対象をオーストリアに絞り、職場からの追放、財産収奪などユダヤ人の生存条件を奪うすべての迫害や、移住から追放（最終的には絶滅収容所）への全過程を視野に入れてまとめ上げている。

第Ⅰ部は前史。十九世紀中葉以降、第一次世界大戦に至るハプスブルク帝国における近代的反ユダヤ主義言説を辿る。ついで第一次世界大戦後の複雑多岐ににわたる諸地域の歴史との関連性の中で起きた悲劇である。著者は各地の反ユダヤ主義の多様な潮流、その意味での「現地の人々」の歴史に目を配り、具体的にはラトヴィア、リトアニア、ベラルーシなどの検証を行ってきた。本書はそうした厚みのある歴史認識を随所に織り込みな

四六判・262頁・3190円
岩波書店
978-4-00-02245-7
TEL. 03-5210-4000

国家と民族の激変が反ユダヤ主義言説にもたらした転換を追跡し、オーストリア・ナチの登場、「ドイツよりも古く、一時はドイツよりも強力なオーストリア・ナチズム」の存在を詳述する。「ドイツでは反ユダヤ的弾圧措置で五年かけて実施されたことが、オーストリアでは五日間で強制された」。一九三八年三月合邦後のユダヤ人迫害体制構築の電撃的あり方はこの前史が重要な前提となる。

本論というべきは「第Ⅱ部　ホロコースト」である。合邦の衝撃のもと、「運び屋」アイヒマンが創出した強制移住の「ウィーン・モデル」を解きほぐし、「ユダヤ人移住本部」の設立経過と移住強制システムを解明する。「常時援助の受給登録者の数が六万人以上、構成員の五六・六％」にのぼる窮乏化したウィーンのユダヤ人社会。その「持てる者」に「持たざる者」の移住費用など諸負担をねん出させるシステム。だが、貧窮化したユダヤ人大衆、特に老人、障碍者、子供などの弱者は、細く薄い救済網からこぼれ落ちてしまう。戦争が始まると必然的に彼らの状態は絶対的に窮乏化していく。ナチの支配者・民衆から「厄介者」、「大食漢」排除のベクトル群が累積する。独ソ戦下の臨時措置として四一年秋に開始された移送政策は占領下のソ連・ポーランド総督府各地の窮状からして受け入れ不可能。早めの冬が到来し、十二月に入るころドイツの電撃的勝利の見込みは消え、十二月八日の日米開戦はドイツの対米参戦を引き起こした。ナチのユダヤ人政策は「追放からユダヤ人殺害へと転換していった」と。

第Ⅲ部は戦後のオーストリアにおける戦後賠償など「過去の克服」を扱う。国連事務総長ワルトハイムが大統領選に出てナチ・ドイツ国防軍将校だった過去が暴露される。しかし結局大統領に選出される。それを可能にした歴史認識・歴史政策が厳しく俎上にのせられる。（ながみね・みちてる＝横浜市立大学名誉教授・ドイツ現代史）

★のむら・まり＝金沢大学名誉教授・社会思想史・ヨーロッパ近現代史。一橋大学で博士号取得（社会学）。著書に『隣人が敵国人になる日―第一次世界大戦と東中欧の諸民族』『ガリツィアのユダヤ人―ポーランド人とウクライナ人のはざまで』など。一九五三年生。